慶應義塾醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

第85回慶應医学会総会開催

三四会奨励賞九名に受賞シンポジウム

「医療提供体制の改革」も同時開催

三四会奨励賞の授与式

十一月十一日午後三時より、慶應大学病院新棟十一階大会議室において慶應医学会主催の第八五回慶應医学会総会および大学医学部共催のシンポジウムが開催された。総会では、相磯貞和医学部長補佐の挨拶に続き、庶務報告、岡田保典理事から平成十七年度決算報告、ならびに平成十八年度予算案が報告され了承された。

総会に引き続き、三四会奨励賞授与式が行われ、九名が表彰された。三四会賞は、昭和二十七年より行われており、平成十二年からは、若手に向けた三四会奨励賞となった。対象は①臨床医学、②基礎医学、③地域医療、社会貢献または三四会活動などですぐれた業績をあげた三四会正会員で、推薦によって選ばれる。臨床医学、基礎医学分野においては満四〇歳以下、地域医療、社会貢献または三四会活動等の分野においては、原則として満四十五歳以下として、審査を行っている。授与式では、三四会比企能樹会長より、それぞれの受賞者の業績が讃えられ、今後のさらなる期待が寄せられた。過去の受賞者については、http://www.sanshikai.jp/award/shourei/index.html にても参照できる。**（受賞者よりのコメントは三面に掲載）**

その後のシンポジウムでは、テーマを「医療提供体制の改革」と掲げ、池上直己教授（医療政策・管理学・54回）の司会のもと、四演題の講義が行われた。まず、基調講演として「医療提供体制の改革について」と題し、岩尾總一郎前厚生労働省医政局長より発表が行われた。平成十五年三月の医療保険制度改革に続き、平成十五年八月に策定した「医療提供体制の改革のビジョン」では、医療計画制度の見直しや医療法人制度の改革などの骨子を基に患者本位の医療提供体制の構築が検討されている。平成十八年度の通常国会への法案提出が予定されているが、これに向けて、医療体制改革の将来へのビジョンについて熱く語られた。（寄稿記事が四面に掲載）続いて、宇都宮啓厚生労働医政局医事課、医師臨床研修推進室長より「新医師臨床研修制度施行一年半を過ぎて」との演題で、平成十六年より新しくスタートした医師臨床研修制度の現状、今後の方向性について宇都宮室長の独自の意見を交えながら興味深い意見が論じられた。例えば、本年三月に実施した研修医に対するアンケート調査によれば、大学病院の多くの研修医がその待遇面や、手技の経験が不十分になりがちであるなどの理由で不満を抱えている現状と、地方に研修医が流れている傾向などがデータを交えて紹介された。矢崎義雄独立行政法人国立病院機構理事長より「独法化により国立病院はどう変わったか」というタイトルで、平成十六年四月に医療サービス面、経営面ともに沢山の問題を抱えながら、再出発した国立ブランドの病院の改革の経過が報告された。各病院の会計システムが現場の必要性を反映させつつ、収入に応じた支出を組み立てる企業会計のシステムに変革されたことで、運営方針の決定が迅速に対応されるようになった点、給与体系が年功序列ではなく業績評価を取り入れたことで、運営の効率化が図られた点が紹介された。新しいチャレンジに挑み、流れを作っていく重要性が語られ、学ぶべき内容の多い講義となった。最後に日本医師会の櫻井秀也副会長より「医療提供体制の改革—日本医師会の立場より」と題された講演が行われた。国民の側に立った「提供されるべき医療」の在り方について、「かかりつけ医」を中心に位置づける医療体制の改革—「専門医」との連携体制の構築の重要性を強調された。

講義の内容はそれぞれに現状の医療提供体制が抱える問題を明らかにし、日頃の病院運営にも参考になる内容であった。参加者はおよそ二〇〇名に及び、有意義なディスカッションを交わし閉会となった。

論壇

大学病院と関連病院との新しい連携

関連病院会会長　**川城　丈夫**

激しくまた急速な時代の変化のなかで慶應義塾医学部・病院と同様に関連病院も大きな波にもまれ続けている。関連病院では医師確保問題・医療制度改革・診療報酬改訂などと浮沈をかけての悪戦苦闘が続いている。栃木県での問題に類することは栃木県だけのことではなく、多くの関連病院でも直面している問題である。慶應義塾大学の医学部および病院がこの方面の問題に真摯に取り組み種々の具体的策を実施されていることに敬意を表する。慶應医学を愛する者として、かつ関連病院の一つである病院に十三年間勤務した現役院長として、慶應義塾大学医学部と関連病院との新しい連携の在り方について私見を述べる。

慶應義塾大学病院はもとより殆どの大学病院はわが国のトップレベルの医療機関として特定機能病院と位置づけられており、医療面では高度医療を開発すること、それを国民に提供すること、そしてその高度医療を他の病院でも提供可能にするための教育研修を使命の一つとしている。これらの専門的であり特殊であり高度である医療が重要である一方、地域に住む人々がありふれた病気にかかった時に、すぐそばにいて質の高い医療を提供できる医師がいることも等しく重要である。すなわち今後ますます重要になる緩和医療・在宅医療などの人材育成にも大学は組み込むべきである。これら人材育成だけを取り上げても大学病院としての事業を成し遂げるためには関連病院は貴重な戦力であり貴重な財産であることは明白である。

現在の約一一〇の関連病院は先人たちの努力の賜物であり、我々はその恩恵に浴してきた。しかしながら多くの病院で慶應出身の医師が占める割合が低下しつつあると思われる。他の大学からの攻勢を受ける場合もある。また医師が不在になった後の後任人事が全国公募になり、厳しい競争となる場合も少なくない。現在の情勢の中で現在の関連病院をこのまま維持してゆくことは困難である。

これらのことを踏まえて慶應義塾の医学部・病院と関連病院の全体の発展を期待しつつ、医学部・病院と関連病院との連携のこれからの姿を考えたい。慶應の関連病院といっても実に様々な実態があるが、今は関連病院と慶應の医学部・病院との連携のありかたを整理する時期であると思う。例えば病院全体を慶應で支え診療・教育研修・研究で強い連携を維持する姿もあるであろう。また病院全体ではなくその病院のある診療科と全面的に連携することもあるであろう。後期研修プログラムに組み込み連携し合う連携もある。また後期研修とは関係なくごく一部の医師枠についての人事交流を行う教育研修の連携もあるであろう。また大型臨床研究のプロジェクトを共同で組む連携もある。これらを兼ね備える連携もあるであろう。どのような連携にしろ、関連病院の立場からは人事が安定していることが極めて重要である。病院の幹部だけを慶應が占めている形態には無理が生じる時代である。医学部と一つ一つの関連病院がはっきりと話し合い、どのような連携のもとでどのような協力・支援なら可能かを、お互い率直な意見を出し合い、慶應医学全体の視点から明確にすることが必要な時期であると思う。当然のことながら結果として関連病院のなかで医学部との関係において様々な差異が生じることは避けられない。

この新しい連携を構築するプロセスのなかで、従来の教室人事ではなく必要に応じて医学部人事を執行できる体制への医学部内でのコンセンサスの構築、また各病院についての詳細な正確な情報の収集などが重要である。

一方関連病院自身も自立をする努力が今まで以上に今は求められていること、自分の病院で医師を育てることも重要な戦略になってきていること、を思う。医師を育成するのは大学病院であるという認識ではなく、医療界全体で医師は育てるものであるという認識に変わりつつある。そして医師を育てることで病院の質が向上すると私は考えている。

医学部と関連病院の双方の努力のもとで医学部と関連病院との明確でありまた確固たる連携により慶應医学全体の向上と同窓生の職場の確保・研究の場の確保・教育研修の場の確保に貢献したいと願っている。

（独立行政法人国立病院機構東埼玉病院院長　内科（呼循）　45回）

平成17年度　秋の叙勲

瑞宝中綬章
安達　正純（32回）
〈功労概要：日・米学術交流功労〉
元　米国日系医師会会長
現　ニューヨーク州立大学医学部病理教授

瑞宝中綬章
宇都宮利善（外　34回）
〈功労概要：保健衛生功労〉
元　国立療養所神奈川病院長

瑞宝小綬章
矢倉　成幸（衛　39回）
〈功労概要：防衛功労〉
元　航空自衛隊航空医学実験隊司令

「慶應義塾創立150年記念事業」始まる

三四会会長　比企能樹
副会長吉野肇一・村井勝・菅沼安嬉子

慶應義塾大学病院新棟一階エレベーター脇の柱に付けられた顕彰記銘を読んだ方は多いと思う。曰く。

「福澤諭吉先生が近代日本に於ける実学として医学を説き、学祖北里柴三郎先生が四谷信濃町当地にその基礎を固めた」と歴史に触れ、更に第二次大戦によってその殆どが消失したことが端的に記されている。

続いて終戦直後の篠原静夫三四会会長が木造二階の建物を三四会員に呼びかけて再建され、当時の高村象平塾長によって一号中央棟が復興されたとある。その後の石川忠雄塾長と武見太郎三四会会長が相呼応して、三四会会員と共に、社中の協力のもと、塾創立一二五年記念事業として十一階のモダンな新棟の建築完成をされたと記される。

したがってこの柱の記銘は、福澤先生並びに北里先生の沸々とたぎる医学への情熱を絶やす事なく、新生・再興に向け偉大なる貢献をされた篠原、武見両先生の偉業を讃えたものである。

さて本塾はそれから四半世紀を経て、二〇〇八年には実に創立一五〇年を迎えようとしている。塾では記念事業を行うべく、昨秋より準備委員会が設置され既に九回に及ぶ検討を行い「創立一五〇年記念事業案」が策定され、塾の最高議決機関である評議員会で本年七月承認された。

本事業を推進するために、塾長を委員長とし、委員は全評議員・常任理事、学部長、大学院研究科長・センター長、大学病院長、塾職員要職者など三〇〇名弱により、九月二十日に「創立一五〇年記念事業委員会」が構成され、九月二十日に初めての会合がもたれた。三四会からは前述役員の他会長、吉野・菅沼両副会長及び櫻井・御子柴両理事が入った。

記念事業室からカラー印刷の趣意書が作成され、発送され始めたので既にご覧になられた方もおられよう。

そこに掲げられた事業プログラムを要約して述べてみる。

a　**新しい基金**　「未来先導基金」の創設と運営

b　**新しい教育**　新しい学部教育、大学院教育の創造

c　**新しい拠点**　人間を育む拠点及び社会連携の施設構築、科学技術のための体制創造と展開

d　**構造改革による新たな展開**　新しい医学・医療体制の創造と医療施設の構築、科学技術のための体制創造と展開

e　**新たな国際展開**　亜、米、欧に拠点を置くネットワーク形成、ITによる遠隔教育の体制構築

f　**新たな環境整備**　記念館建替え、その他

そして、締めくくりに事業総計と募金目標額が記されている。

これらの事業の展開は、今後事業委員会で議論をじっくりと重ね、その上で実行に移していくことになろう。

さてそれでは、塾医学部はいかなる構造改革を望まれているのだろうか。

現代において医学者、医療者を教育する場であるとき、わが慶應義塾医学部には、どのような問題点があろうかと考えた。

本医学部に入学し医学を学ぼうという若い諸君が、他大学と比べても卓越した才能と学力を併せ持っていることに異論はない。しかしながら福澤先生、北里先生の目指された実学としての医学の「人を癒す」ということが、どのようにして彼らに伝えられているか、あるいは充分にその精神が教えられているかと省みると、単に机上の学問だけ優れていて、そこに心が籠もっていなければ「無」に等しいと思うのである。

新しい学問を貪欲に貪り、それを消化して「人を癒す」という原点に繋げてこそ、医学教育の発展はある。

医学部の各専門科には、国際的に屈指の指導者が配されている。しかし優秀な医学者を育てる土壌に、学問の停滞、人事の風通しの悪さ、つまり単に慶應の名を背負うことで満足し学問の進展に努力することなく日々を過す人が居ないだろうか。この部分の改善こそ、構造改革に結びつくものと考える。

この事業計画に目を通すとき、わが慶應義塾医学部の表玄関であるべき病院の、新棟以外の施設の現況が他の大学病院と比べ悲惨であることは衆目の認めることである。上記の構造改革を成し遂げるとき、それを収める新しい皮袋が用意されなければならない。

一方、塾全体を鑑みると、記念事業で同一学部に偏りが生じるのは、厳しいものがあるかもしれない。

しかしこの際、わが慶應義塾のために医学部三四会として、出来得る限りの協力を惜しまないことが、一五〇年記念事業のキーワードである「独立」と「共生」の精神が生かされることとなる。ひいてはこの実績こそ、われわれの大きな夢であり悲願の事業を達成する近道ではなかろうか。冒頭に掲げた篠原、武見両先生には遠く及ぶべくもないが、せめて偉業を仰ぎつつ頑張ろうと思っている。

塾としては四半世紀に一度の大事業であることから、今後の詳細な経緯、内容などを、報告していきたいと考える。

三四会会員諸氏におかれては、追ってお届けする趣意書を御覧の上、是非とも積極的な御理解御賛同をお願い申し上げる。

落穂

半寿の独り言

傘寿の次の年は半寿ということをある小説家の随筆で教えられて、ささやかな小宴を誕生日に今年はもたせて頂いた。

それから一ヵ月して韓国の李任順教授より国際電話にて十月の韓日カンファレンスにおいで下さいとの招待を受けた。李教授は私が現役時代に教室の研修生として留学され、当時は講師であったが今や女性での第一号の主任教授として活躍されている。それかあらぬか五年前にも釜山での韓日カンファレンスにも教室に留学されていた林君からも招待を受け渡韓したことを思いだした。彼は韓国での生殖医療の第一人者として、全韓で七つの病院を有し国内の五〇％以上を主務されているという。日本においでになったときには、さほどのケアをしたという覚えがないのにいずれの先生方も、退役老人のことをいつ迄も思い出して下さるとは、些か感佩したわけである。今年の八月よりは羽田よりソウル行きのフライトが企画され帰りには金浦空港より一時間半という道程であり、一衣帯水の国とはこのことかなと感じ入った。一九七二年以来韓国に渡航すること十五回に及び当会の他にJICAの仕事で順天郷大学のMCHセンター（母子センター）の設立にたずさわり多くの方々と交流の機会を持つことが出来たのは幸いこの上ないことであった。渡航するたび益々の活気と生命力の伸長をみせつけられる思いがしたが、この度はさらにそのパワーと成長性に刮目させられた。さらに私の処に研究論文作製のため専攻生として勉学していた朴君は今や乙支医科大学総長として活躍されていることも御同慶の至りであった。慶應医学を慕って業成り、恒に思い出して頂いている方々の余恵に侵った今年であった。

（飯塚理八　27回）

メラノーマ研究分野において論文あたり引用件数が世界第二位に

先端医科学研究所
教授　**河上　裕**

「自分の発見が多くの人の目にとまり、役に立ったということを純粋に喜びたい」。こう話すのは河上裕・先端医科学研究所細胞情報研究部門教授（先端研59）である。

河上教授は**Impact Factor**（以下IF）で知られる米**Thompson ISI**（以下ISI）が行った過去十年間の論文引用数調査の結果、メラノーマ研究の分野において論文あたり引用件数で世界第二位、総引用数で同三位となった。また、ISIの運営する**ISI Highly Cited.com**においても、免疫学の分野で**Highly cited researcher**に登録された。そして、このような活躍に対し、ISIよりインタビューを受けた。

河上教授の主たる業績は、Tリンパ球が認識するヒトがん抗原の実体を、遺伝子クローニング法を用いて分子レベルで解明することにより、抗腫瘍Tリンパ球の生体内動態を測定可能にしたことだ。これにより、効果もメカニズムも不明瞭だった「がん免疫療法」に対して、科学的にアプローチする方法を確立し、自身もその方法を開発している。そしてこの研究が、メラノーマという一分野を超えて、免疫学や腫瘍学全体の研究の下地になったことが、多くの引用件数につながった理由となっている。

掲載された一論文あたりの引用件数をジャーナル別に集計してつけられた点数であるIFは、研究者の評価指標としてよく知られる。しかし、総説論文掲載割合が高いジャーナルや、学問的に研究のサイクルが早い分野のジャーナルほどIFが高くなるなど、欠点もある。そのためにIFによって研究業績を測る事については種々の異論があることも事実である。そこで近年、「個人あたりの論文引用件数」つまり、ジャーナルではなく「個人のIF」とも言うべき指標で研究者の業績が測られるようになってきた。ISIの調査はそのような背景をふまえて行われたものである。

しかし、河上教授はこのような指標で世界有数を誇りながらも、「IFや論文引用件数は偏差値みたいなもの」と言う。すなわち、これらの指標は、研究レベルをある一断面で評価したものにすぎず、その研究の価値を総合的に表すものではないという。そして、一口に論文引用件数といっても、自身が一つ一つの論文にどのくらい関わっているかはまちまちであることなどの問題点を挙げた。筆頭著者や責任著者として関わった論文と、一共同研究者として執筆者の中ほどに掲載されている論文とでは、関与度が全く異なる。例えば、自身がリーダーシップをとっていない研究で多くの引用件数のある論文が自分の業績に組み込まれる一方で、自身の研究の根幹にあって引用件数も多い抗原発見の論文が、十一年前であるということで今回の集計対象外になっていることの矛盾などを、河上教授は指摘した。しかし、常に新しい事を世界に発信するという、研究者の役割からみた場合、論文引用件数とは個人の研究がどのくらいの人に影響を与えたかを客観的に示す一つの指標である。その意味において、河上教授は冒頭にあるように、今回の集計結果とISIからの取材を純粋に喜びたいと話した。ただし、「これは過去の事であり、自分にとって本当に重要なことは『現在』および『これから』である」ことも付け加えた。

最後に、河上教授は現役医師に対して「経験だけに頼らない科学的な思考を身につけ、臨床の腕を上げるためにも、臨床医が基礎研究に数年間集中することは大変よいこと。臨床にいってからも基礎に戻るという世界がある事を是非知ってもらいたい」と話した。そして、研究者および学生に対しては「日本の教育は、網羅的、マニュアル的であり、『これだけ学べばそれで終わり』という側面が強い。自分たちで未知の課題を見つけて、それを解決するという思考習慣が身に付かない。しかし、学生たちには素質も実力もある。彼らに研究の重用性や面白さなど、モチベーションを与えるのが我々研究者の役割の一つ。学生もまた研究を怖がらずに積極的に飛び込んでほしい」と語った。

内科出身であり、米国留学を機に研究に専念、そして免疫学の分野で世界をリードしている河上教授の言葉には、多くの経験に裏打ちされた実感がこもっていた。

なお、ISIの河上教授に対するインタビューの内容は http://esi-topics.com/melanoma/interviews/YutakaKawakami.html に掲載されている。

（五年　正木克宣）

三四会事務所関係電話番号

※慶應病院代表番号　三三五三—一二一一

●三四会事務室　内線　六四九九五（ダイヤルイン　五三六三—三七三五）

●医学部新聞編集室　内線　六四九九六

●慶應医師会事務室　内線　六二七六五（ダイヤルイン　五三六三—三七三九）

赤倉山荘管理事務室　内線　六二三一四（ダイヤルイン　三三五九—〇二二七）

※FAXは共通です。　三三五八—〇六六四

※医学部新聞関係へ御用の方は三四会事務室又は編集室までご連絡下さい。

Eメール：info@sanshikai.jp

ホームページ　http://www.sanshikai.jp/

三四会事務室